



# 環境経済論A

## 第4講

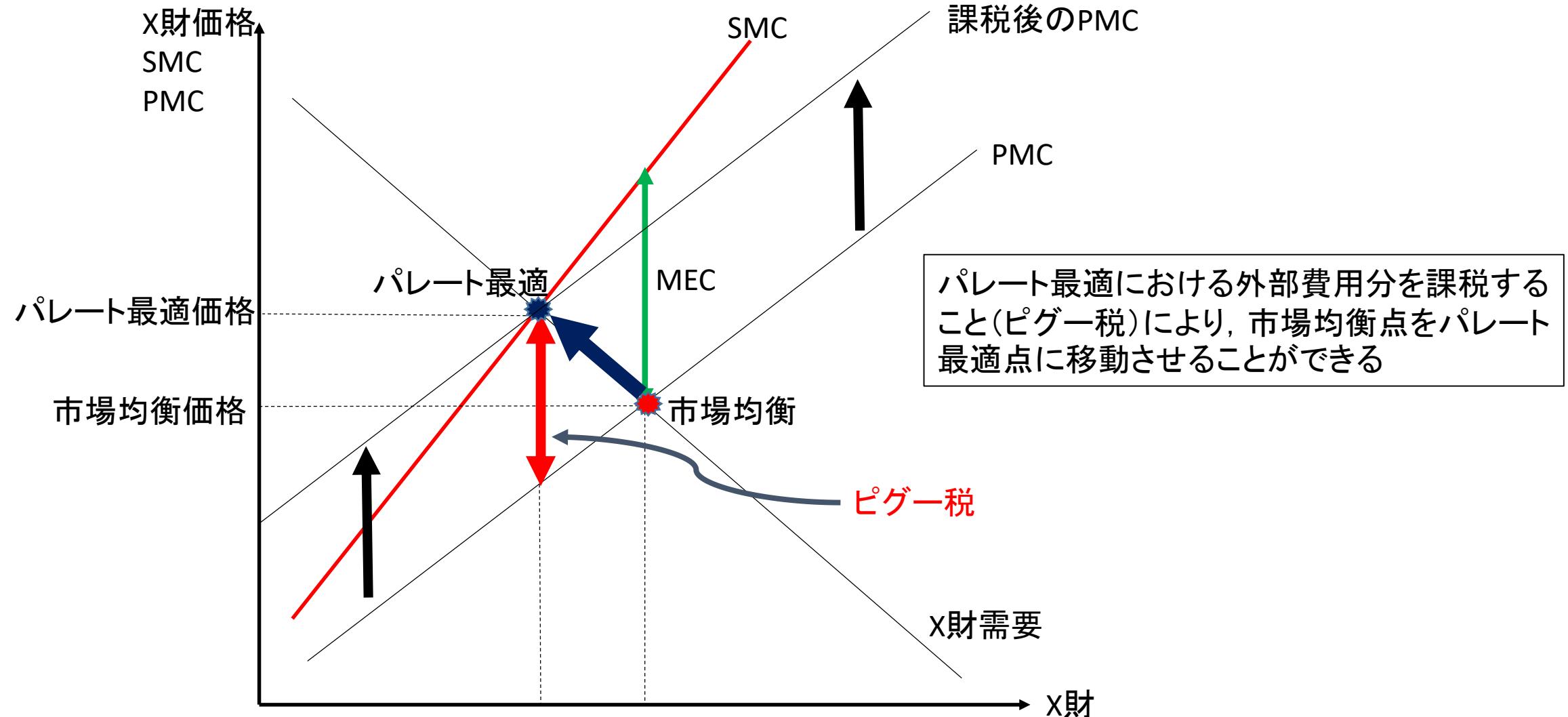
### 外部性②

# ピグー税政策(外部性の内部化政策)

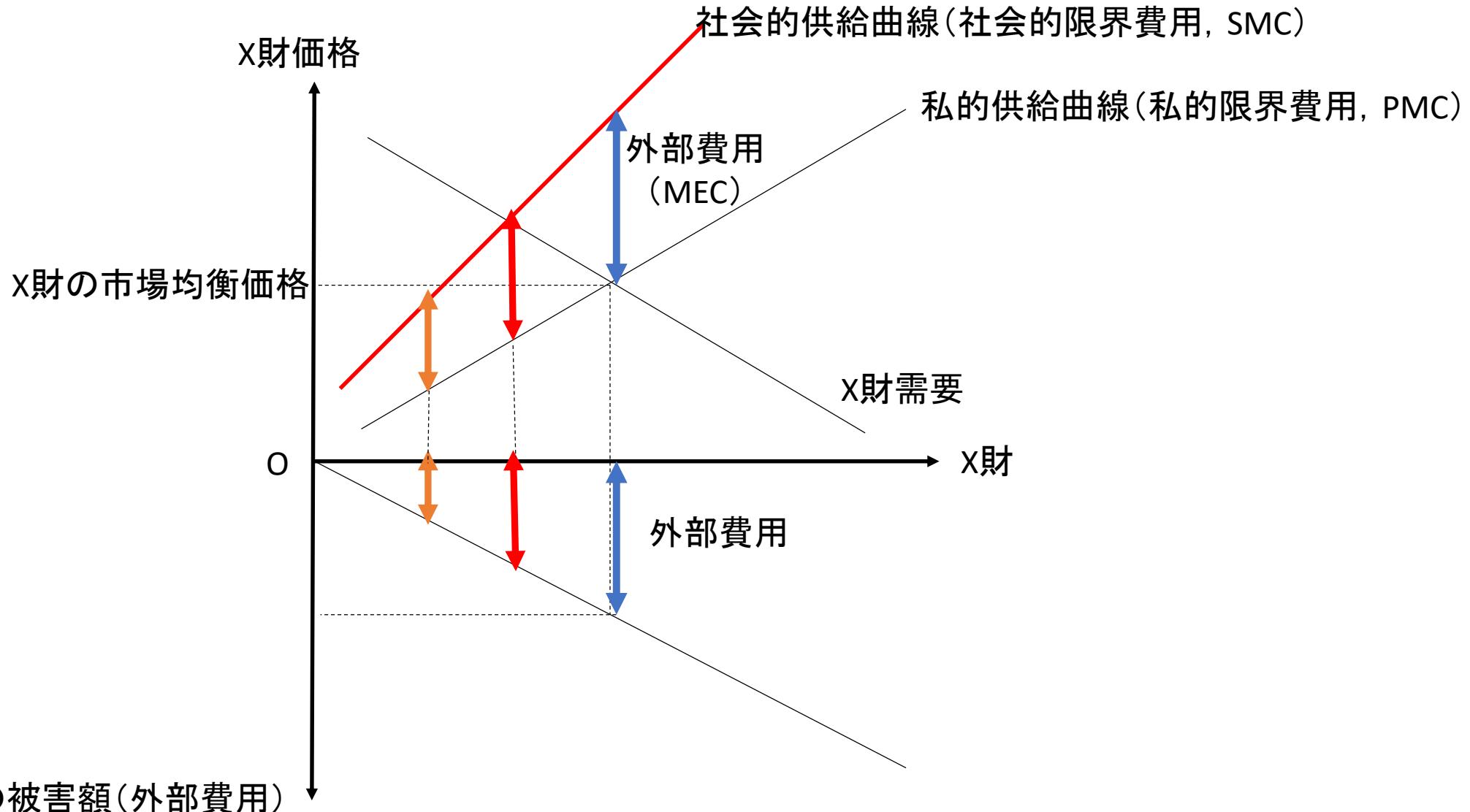
- ・パレート最適点における限界外部費用MECに等しいピグー税を課すことにより、私的限界費用PMCがシフトし、市場均衡点はパレート最適点と一致する。
- ・パレート最適点の位置を知るためにには、社会的限界費用SMCを正確に知らなければならない。→ 限界外部費用MECを正確に知らなければならない。
- ・限界外部費用MECを正確に測定することは困難である。
- ・厳密な意味でピグー税政策が現実の世界で実施されたことは皆無である。  
(「温暖化対策税」、「ごみ有料化」、「産業廃棄物税」等は、ピグー税ではなく、ボーモル・オーツ税である。)
- ・ピグー税政策の次善的政策Second Best Policyとしての「ボーモル・オーツ税(Baumol=Oats Tax)政策」

# 復習

# ピグー・モデル(課税政策=ピグー税政策)



# 復習 ピグー・モデル(外部費用の導入)



# 復習 ピグー・モデル(外部費用の導入)

- 単純化の仮定

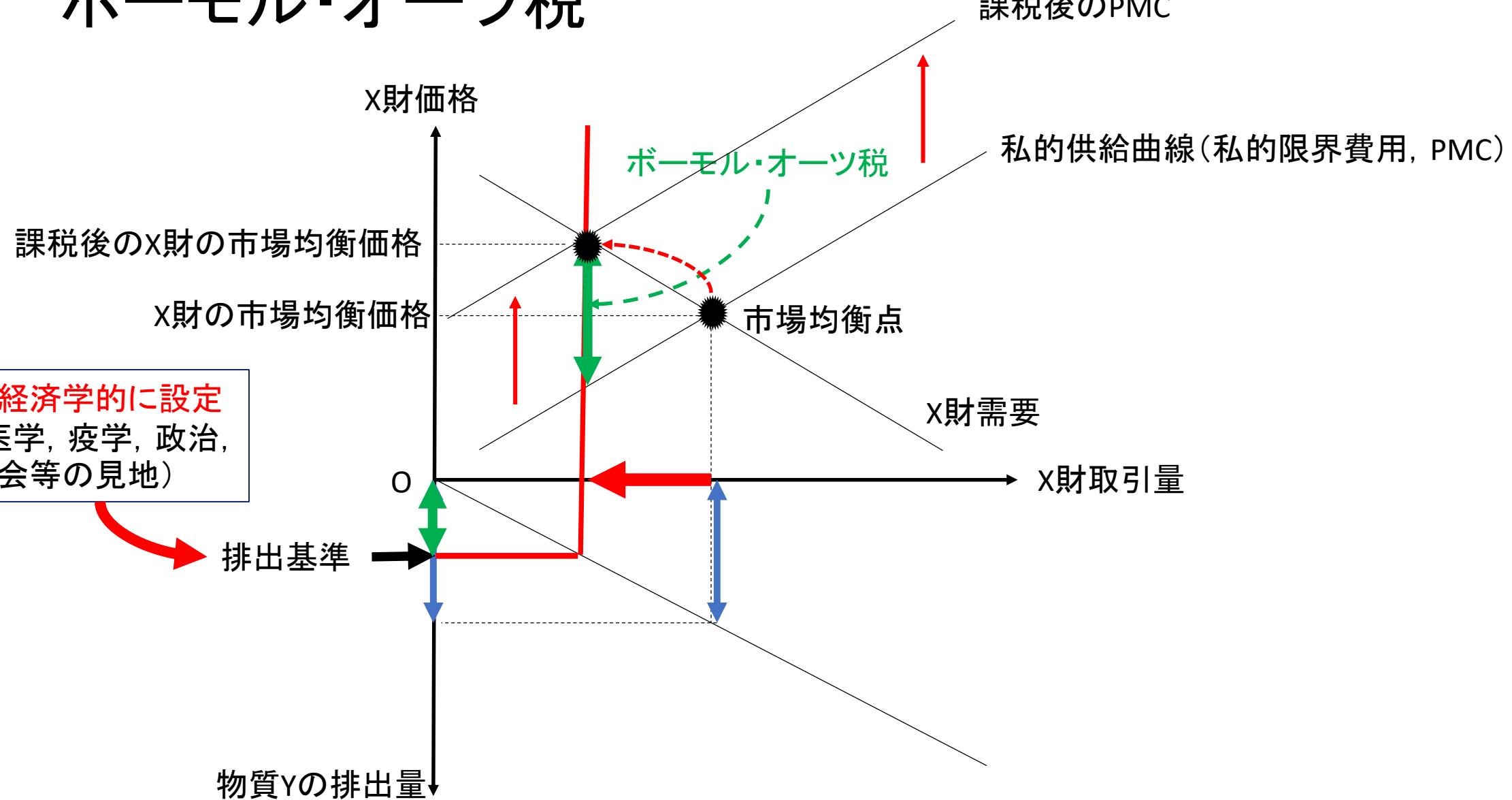
① $X$ 財生産1単位当たり、物質 $Y$ は1単位排出される。

②物質 $Y$ 排出1単位当たり、消費者の被害は、1円である。

# ボーモル・オーツ税 Baumol=Oats Tax

- ・ピグー税政策は、**正確な外部費用の計測が可能**であることを前提としているが、現実には困難である。
- ・そこで、ピグー税政策の次善政策(Second Best Policy)としての**ボーモル・オーツ税(Baumol=Oats Tax)**政策が現実には実施してきた。
- ・ボーモル・オーツ税政策は、パレート最適点の位置が不明(限界外部費用MECが不明=社会的限界費用SMCが不明)である場合の環境政策である。

# ボーモル・オーツ税



# ボーモル・オーツ税

- ・ボーモル・オーツ税政策は、**非経済学的(医学的, 疫学的, 自然科学的, 政治的, 社会的)**な見地から排出基準を設定し、その基準を守らせるための経済的手法(課税政策)である。
- ・ピグ一税政策が、外部費用を内部化(外部性を市場取引の内部に価格化)する「**価格政策**」であるのに対し、ボーモル・オーツ税政策は、環境政策目標に主体行動を誘導する(排出基準を守らせるために、基準を超える排出量に対して課税する)「**数量政策**」である。
- ・「温暖化対策税」、「ごみ有料化」、「産業廃棄物税」等は、ピグ一税ではなく、ボーモル・オーツ税である。

# ピグー税政策とボーモル・オーツ税政策(まとめ)

- ・ピグー税政策：外部不経済の発生＝外部費用(MEC)の発生→PMCとSMCが乖離→市場均衡点とパレート最適点が不一致→パレート最適点における外部費用分(MEC)に等しく課税政策を実施すること(ピグー税政策)により、市場均衡点をパレート最適点に移動させること(**外部性の内部化**)ができる。
- ・ピグー税政策の前提是、MECが正確に計測されることであるが、困難。  
→ピグー税政策の次善政策としてのボーモル・オーツ税政策
- ・ボーモルオーツ税政策は、環境政策目標実現のための数量誘導(課税)政策である(ボーモルオーツ税政策は、**外部性の内部化政策ではない**)。
- ・**外部性の存在→内部化政策あるいは政府の政策介入が必要**  
(コース・モデルの政策的帰結と正反対)